和文讀本

稲垣千頴輯

巻三

30474
教科書文庫
3
810
51-1887
0130
449324

中央図書館

和文讀本卷三

稲垣千頴 輯

武勇

袴垂保昌ゐあふこと

宇治拾遺物語

源隆國卿

昔袴垂とていみじきぬすびと盗の大將軍ありけり。十月ばかりゐの衣の用意あるべき衣少しおうけんとて、さらぬべき所々うかがひありきけるに、夜中ばかりゐの人皆寝ぬるに、後月の朧ゐ

広島大学図書
0130449324

るふきぬあやうく著たりけるぬしのきぬ（奴袴）
そば（側）挟ゝきぬ（帛）北狩衣めきたる著てたゞ一人
笛ふきて行きもやらぬゆけバあそ是こ
そ我よきぬ得きせんとて出でたる人なめ也と
思ひて走りかゝりてきぬを剥ぎんと思ふまゝ
やしく物の恐しく覺えけるバ添ひて二三町む
のゝいけ（行）ども我ふ人こそ付きたると思ひたる
けしきもあしいよゝ笛を吹きたくいけバ試らん
と思ひて足を高くして走寄りたるゝ笛を吹き
あゝのら見返りたるけしたる取りのゝたるべくも覺
えざりゝ（退）ゝ走りのきぬかゝりまあ（數）ゝ（度）びて
とさまかうさまふもたるゝ露ばかりも騒ぎたる
けしきあし希有の人のあと思ひて十餘町ばこの
ゝ具して行きとそあらんやと（アリトシ）思ひて刀
を抜きて走りかゝりたる時ゝそのたび（度）笛をふ
きやゝとゝふちのへりとゝハ何者ぞとゝふる心
もうせて我ふおとをついぬらきぬ又いこゐ
る者ぞとゝへば今ハおぐとゝよとあぐとと（迹）

危げよ　危険なゲハ揺子ト云フ

覺えぬ事ばかりとをぎ（人剥）ふ候ふといへば何者ぞと
とへば あざな（ヲ）袴垂とあんいたれ候ふと答ふ主
ばさいふ人のありけるときくぞ危げよ希有のやつ（奴）
つのおとといひく共よまうでたりとむかりいひの
けて又同じ樣ふ笛ふきくゆく（来）此の人ゆけし（す）
今ハおぐとよもふごのちどと覺えけ主ば鬼よ
神とも主ふるやうおく共ふ行くおどふ家よゆ
きつきぬいづこぞと思へば攝津前司保昌と
ふ人ありけ主家の内よりよびい主く綿あつき衣一

おく つけく　氣味悪ク思ヒたる意

を給ちりく きぬの用あらん時ハ參りて申せ心
も知らざらん人ふとりこのつまく汝あやまちを
おとありしこそおさまくむくつけくおそろ
しのりしろいとこの主し人のありさまなり（下）捕
へらまくのちのちりる（ヲ）

重忠長居相撲のこと　古今著聞集

鎌倉前右大將家ふ東八ケ國うちもぐりたる大
力の相撲出きく申して云當時長居（ナガヰ）ふ手向（ヒモベ）

き人わがえ候もび畠山荘司次郎ぞこのりぞ心よ
くう候ふそをとそも長居はたやすくハいのぐろ
ひきたくうらう侍らんと詞もたぐ のくばいひ
けるを大将聞給ひて此の事ねごまもう思給ひと
る折ふ重忠出来りれる白き水干ふ葛袴黄な
るきぬをぞ著たりれる侍ふ大名小名所もあく
居あたる中をわけて座上ふひしと居たりけ
る大将なお近くそれへとありれをどる畏り
て侍りけるさく物語して抑所望の事の候ふを

申し出うんと思ふが定めて不許ぞ侍らんぞ
らんと思ひ給ひながら又たぐふやまんも忍び
ぐうして思ひ煩ひうるとのたまはせをば重忠
もの申を事ハおくて畏りて聞居たりれる此
の事たびくあるりる時重忠ちと居直りて君
此御大事何事ふて候ふとるいのぐろ子細を申
し候うんといひうけをば大将入興したまひ
てそ此庭ふ長居めが候ふぞ貴殿と手合をして
試をやと申をあり東八ケ國のもぐりたるよ

し自稱仕るゞ。ねくてましう覺え候へバ。賴朝ありとゝ試みぢやと思ひ候へども。そりゝきそもを（其方）そそおひ申そぞ。試を給へとのゝまえせゝ。重忠存外げふ思ひく。彌深く畏りく。ふこゝとあし。大將さゝバおそこれハ身なゝらも（本ノマヽ）ひおひの事ふて候へ。さりあゞらわゞ所望此の事ゝあるとゝ侍りける時。重忠座をたちく。閑所へゆきて。（分カヽ）くゝゝもを烏帽子ゞけなゞてゝり。長居ハ。庭ゝ床子ゝ尻のけく候ひける。（ガ）そゝるゝたちてたふさぎ（褌）のゝをくねり出でゝりまことゝ（ノ）體力士の如くゝみえゝゝバ。畠山もいのゞゝ（アヤマリ）ゝぞあゞえゝるゝゝ。寄合ゝりゝるゝ手合して。長居。畠山ゞ小くひを強くゝちく。袴の前腰をとらんとしゝるを。畠山左右の肩をゝしゝとおさへく。近づけぎゝくて程へけゝバ。景時。今ハ事ゞらおらん候ひぬきゆうまてや候ふ。ゞのらん。と申しゝるを。大將いのゝさゝゆうハあらん。勝負あるべしとのゝまえをしてねバ。長居をちりゝふゝ。やゞく

死入りて足を縮めそらしられば人々よりておしかがめくこのき出しふるを重忠は座をこのへりつく事もあく一言をいふまとなくてやごそいでよけを長居たそをよう肩の骨くだけそかたをものふなりくをまひとる事もなのりくを骨をとりひしだよけるまこそ目驚きたるまとあ

遣唐使虎を殺せること　宇治拾遺物語

源隆國卿

今は昔遣唐使ふてもろこしを渡りける人の十ばかりなる子を乞見でおるまじかりければ具して渡りぬはくまぐしくるるあだ雪のいと高くふりたりける日ありきもせず居たりけるまのちおの遊ふいぐくいめるがおそく帰りけをバあやしと思ひて出でく見をバおしのこう足形しろれ方あとふみくゆきたるを添ひて大なる犬の足形ありくそをよりまのちごの足ぐを見えば山さまふゆ方ちたるを見てこをは虎の喰ひ

ていきけるあめりと思ふは爲ん方なく悲しく
て太刀をぬきて足形を尋ねて山の方へぬきて
見るに岩屋の口ふ此のちおを喰殺して腹をねぶり
て伏せり太刀をもちて走るよれば得あげても
ゐのぐかいのぐまりて居たるを太刀にて頭を
うてば鯉の頭をわるゆうなるぬ次はまこそ
むさまはくそんとて走りよる背中をうてば背
骨をうちきりてくくとなつさく子をば死
なたるに脇ふこの挾てく家へ歸りたるば

北國の人々見て あちあはあること限なしこと
しれ人ハ虎はあひてふくる事たは難きふ
虎をば打殺して子を取返して來たるハはあこし
の人ハいみじ怪事ふいひてなを本日本の國はハ
兵北のるハあるびあき國なりとめどたるど子
死ぬ々れば かふ〻のかせん」

遊戯

行成卿扇合のこと 古今著聞集

行成卿いまだ殿上人のころ殿上にて扇合とい
ふ事ありけるに人々珠玉をかざり金銀をみ
がきてわれおとらじといとなみあへりける彼
の卿は黒くぬりたるほそぼね（細骨）に黄なる紙をはり
て樂府の要文を眞草にうちまぜてをかしく書
きていだされたりける御門（ミカド）御覽ぜられて此の
扇こそいはれありてをかしけれとて御前にとゞ
めらせけるとかや（ナリ）（イヒ傳ヘタル）

花合　古今著聞集

後二月ハ潤二月をいふ
内の女房ハ内裏の女官をいふ

右衛門の陣ハ紫宸殿の西南月花門の内なり

さくらびとハ催馬樂呂の歌の名なり

橘成季

長治二年後二月廿日あまりの頃内の女房少々
花を見侍りけるに廿三日に一枝を折りて奉る
べきよし天氣ありけれども日くれて奉らざりけ
れば其のうらみ（遺慽）ありとてつぎの日左右をわかち
て花を合せられけり左の方はあさとく櫻の枝
をりてゑもん（右衛門）のぢん（陣）に後まうでしたりけりいつゑ（五枝）
をえらびてもて參りける備後介有賢朝
臣拍子とりて櫻人をうたひけり管絃をもつ

釣殿ハ殿ヨリ

ゑとまハ今俗ニ島臺といふものなり

け侍りなん。この花を泉殿御所おうしゝうゑて。釣殿おそ御遊ありけり。右の方花おそのうけ出ハ。上達部五人を（ヲ）つかはしてゑとまを（洲浜）北後滿座和歌を奉おたゝうをを參りけるを。人々（ワカヲ）つかうまつりけるべきよし勅定あり。

兼時敦行競馬北山と　古今著聞集

正暦二年五月廿八日。攝政殿。右近の馬場にて。競馬ありけり。十番（ツイヒ）山井大納言。儀同三司。共に中納言おておはしける。左右に分けて。公卿（ニ）あはく參らせけり。一番（ハ）左。將曹尾張。兼時。右。將曹同敦行（カ）つかうまつりけるが。兼時が轡（くつわ）ぬけ（脫）けるを。おつることをなりぬるを。さりなのごとくつひに敦行勝ぬ。兼時敦行ぬ（モ）の人をまけてといづかへ行くぞといひたりけり。人々その詞を感じて。纏頭（ちやう）をとるとあん（カヤウ傳ヤウ）いまだ競馬ぬまけざりけるものをとくいひける。（矣）

いと興あるいひやうなるべし」

俳諧

道風朝臣の朗詠集のこと　徒然草

卜部兼好

ある者小野道風がかける和漢朗詠集とて（すぐれ）たりける筆ある人御相傳うける事なり侍らしなん（浮虚）四條大納言（えらび）給たるものを道風の（任）ごとく時代や違ひ侍らん（おなじこと）

（侍り）ことのひりきを候へばおそ世まあり難き物なり侍りけれとくいよ〳〵秘しかくし」

鳥羽僧正の繪ねぶと　古今著聞集

橘成季

鳥羽僧正は近き世まれなるびなき繪のたなり。

中略

いつのほどに事あり（アリシ）供米の不法のあとありける時繪ゐかゝきたる（バ）辻風のふきくるまに米は俵ゝ多くふきあげられぬ（鹿灰）ちりもひは如くまに空まあがるを大童子法師ぞらそらをまりとぶめ（輩）（テ）

んとしたるを（トヨロ）さまざまふあをしろう筆をふるひ
をかゝきたる幾誰かあたりたん其の繪を院御
らんじて御入興ありたるそのころを僧正は御
たづねありたれば あまりは供米不法は候ひて
實のもれを入り候をぞ糟糠（メカ）のを入りて輕く候
ふわどは辻風ふ吹きと上げら出候ふを さまとて
ハとき（ヨレ）小法師ぞらが取りしぞんとし候ふが
をのしく候ふを（ヨレ）書きて候ふと申さをければ比
興の事ありとく そを出より供米のうたきぞ

彫りく不法のことあのうりたを」

學生定茂がこと 古今著聞集

橘成季

進士志定茂（シンビリシン）といふさもらひ學生ありたるあるが
人のもとふ有馬の湯へ行くとて（トヒ）むこのむきを人（行 勝）
は借またりたるは ゆとの（具）けかしたりたるを見
てふたりまでりたる（六）過分ありとくかしを
ばうのへしてけるその曉はありく片皮は左右の
足をいきて馬ふのりんとしたるは あゞのふの（何為）

らきん（コトヨリ）あひはあひたる下人あまくあしのせけ
ぜどもこの形をば。こくけりわづらふわざは人見
あひてあれ（彼）いこのふといひはげらひりるをり。
をどをてちとりおけり。をまづすしさよとど」
彼の定茂承元二年十月廿八日。文殿の作文は參
りさるるは夏の袍を著たりそるを見て。上下
はらふことこのぎり形。定茂わのをを笑ふとは
知りげまおくてその日はやそまはけを後はある
のんたちべの許へ參じて申しそる（上達部）ハ（下）ひとそ文（一日）
殿の作文は夏の袍を著てまゐりて侍りしを人
々見候ひてあまりは學問をして四季をだはを
らぬやさしさといふさぐ（部）さあるこそのりて候へと
自讃しそ世びきくもの嘲弄せることを限おのう
けを」

良覺僧正のよび名のあと　徒然草

ト部兼好

公世の二位北せうとは（兄人）良覺僧正（テ）ときこえ（僧）ハ
極めを腹あし知人ありそ星坊のかくそらふお

ほき形る榎の木ありけるを人えの木の僧正と
ぞいひける此の名然るべからぬとて彼の木を
伐らせ給ふ其の根のありけるをきりくひぬ（伐 抜）
僧正とゐひけり いよ〳〵腹たちてきりくひを堀
りさくたりけるを其のあとあるべきある堀ふく
ありけるを堀池僧正とぞいひける（補）

人の田苅る男の言（徒然草）

ト部兼好

人の田を論ずるもの訴へまけてねたがるもその（嫉）

田をこのりてとる人をつのりしるまゝ（ツヒ）
道すがらの田をうへかへてゆくを是ハ論ト（去ノ）
なるべきところ多あらじ（不ル）このふうくハといひけ
るを苅る者どもそれをあるべきこ
とにあらぬなりとる者ども（非）彼の事せんとをまこのる者な（行）
れば いかゞくをかからぬとぞいひける（ん）こと
わりいとをかしくうまけり

鹿を射損ずる人れあと（古今著聞集）

橘成季

前大和守時賢ゞ墓所ハ長谷といふところおほ
まそこに北留守をるをとこくまを(弥)かけく鹿を
とりくるわざをなる日大鹿このまたりくるこの
をとこいねるふゆうくまりけくとりたらんい
とねんぶし射殺したりといひく弓ハ上手のよ
し人(念無)はきこのせんとおそひをくりまのけくる
鹿ふ向ひて大このまをまるをたをげく射くりけるか
くふ其の矢(雉股)をのふハ中らぜしをくまをまりけ
たりくるこのづらはあたをくりくまぞかげらハ
きをとく鹿ハ事ゆゑ形くくとくまをけてゆきあけ
り此の男の(頭)らがき(掻)をすをどをさくふ益形し

猫まを怖るく連歌師の事 徒然草

卜部兼好

奥山ハ猫またといふそのありく人をくらふな
ると人ハいひくるを山なからねどをいふらはも(此處等)
猫のへあごりを猫まをふ形くく人をとる事ハあ
なるものをとふ者あをけるをなふ阿彌陀佛
とのやいく(イク)連歌しくる法師の行願寺ハほくりまあ

をけるが（こゝにきて）一人ありこゝん身はいとゐを設き事ま
こそ（こし）と思ひるこゝろしもあるとゐるまく夜ふ
くるまで連歌して只ゑとりこゝんりくるふ小川
れをゐゐを音ときゝし猫まるおやまを足の
ゑとへふとより來てやごくこのをつくまゝ頸（即）
のほどをくゑんとを肝こゝて（神）ゐまうを防げん
をするまちのゐも明く足もたゝを小川へまゐ（轉）
び入りを助けよや猫まるよやゝとさけべむ
家々より松どもそめゝて走りゐりて見ゑば此
のわゝり（邊）ふ見知ゑる僧なりまいいのふとて（ヒタルバ）河
此中より抱きおゝをゑば連歌の賭ゐりを扇
小箱おど懷ふ持ちゐる（モ）も水ま入りぬけゐまし（希有）
て助りをるさまゝゐ（遠）ゐゝ家ふいまふ久（ヒトツ）飼
ひける犬のゐらゝゑどゐ（遠）ぬしをゐりゐとびつき
たりける（オリ　イヒケル）ゐぞ」

をこ者已が影ふ怖ゐ語（今昔物語）

今ハ昔受領の郎等ふ心ハおくゑを（臆）人ま武く見

えんと思ふをとこありけり。ある日。ねのつきよ
外へゆうんとて用意しける。其の妻未明まお
きてくひもの(食物)をこしらへ(設)をせんとするまありお
けの月ゆ板間よりさし入たるをこのりまをれ
ばの影ゆうつりたるを見て。大まおそをきりおお
ひてちとだつく。夫ゆ眠りうるそをふかげゆき(側)
て。夫ゆ耳はさてやきける(下女)ハのしこま髪おろく
どしくうるゆらをぬすをとゆ(密語)入りてたちうるあり。
出て見たまへとをいへば。夫そをきをいのふせんと(盗)(童)
するふや。(アラシ)(僧)たゆき事ゆ形をいふまくふ。枕上まの
けうる太刀をとりて。其のやつ(奴)頸うちおとさん
とをしくしりて髪うちみだし形ゆらをぐろまを
以でけるゆ。月影はあのゆかげのうりりしを見
て童ゆあらで。太刀ぬきあるをとをおもそあ
りゆ色。このふまじとふるひあるゆきをうとを(オモヒテ)(戰)(慄)
けびそまげいりく。妻ま向ひて。日ゆをとをうる(汝御許)(聞)
きつをそをとく妻とこそおもひつ(ツレ)るま。何を見(兵)
あやまりたるまや。(アラシ)ゆらをぬををとまかあをぐ。

髪みぐしたる男れ太刀ぬきをちうるふこそお
りはきされどもまいの盗人臆病りのとこえそ見
がいでたるを見て持ちうる太刀をおとをたの
まこそ幽々ひつき我い外へゆく門出なきバた
うあき疵被らん(ヲフ)もよ(益)くあし(女)をみなをもよも切
らじ由知く追ひいぶきもべしと以ひく衣を引の
ぶりてふしたる妻いもくこのひ船き事なりこく
て弓矢をとりく仕へ給ふふや(エフヤ)いくとき行きて
見んとそたちいでるは夫のそをふありるの

みしゆうじよあうりけれたふきて夫ゲ上ま
あるひぬ夫ふきい盗人ゲわをひこうをたると
心得て聲をあげくさけびゲきバ妻ゲいもく盗
人ハをやく立ちまるそれ上ある(モノ)ハ障子のた
ふきかくりうるありといふ時夫おきあぐり見(テ)
るま盗人も形をれバ居直りてむぐのある脇を
このをを手をねぶりてそれやつ(奴)ままとま我ゲ許
ま入来て物取りて去りあんや(エトラン)盗人やつ(奴)障子を
ゆくこのけく去りふりを入りくちぐあくまし

障子

紙

のぞ必搦めくまり。わおかりとのつたあくく。このく
ハふんぐつるとんひひきバ。妻ハおたれてぞ笑
ひける」後ハ妻ゞ人ハ語りけるを聞傳へてこのく
ぶんかくりける。

羇旅 離別附

治承四年。福原の新都ハ供奉の人々。所
々遊覽の條 源平盛衰記

不知作者或云葉室時長卿作

八月十日あまりハあるべく。新帝ハ供奉の人々。つ
きぐをなぐさみ。らひ。名所の月を見んとく。
かをひくよ行別る。あるハ住。江。住とく。難波ぐら。
葦屋の里ハ嘯きゆくく人もあり。或ハ源氏大將の
跡をおひ。須磨より明石ハ浦傳ふ人もあり。和歌。
吹あゞ。玉津島。月落ちるあをもしま。松風ハ
げしき高砂の。波間をたどる人もあり。浦路をの
よふ人もあり」其の中ハ後徳大寺左大將實定ハ。
舊都の月をこひわびて。入道ゆくまゝ。都へ

伊勢物語ながらの星の川べの螢ゆめ見のあまのたく火ゆ
永塚の故事ハ万葉集大和物語等ニ見えたり
新古今集ニ天皇みよしの山水かれて
なる井川タハ秋を
なおもひ

上皇給ひけり（ア卿ハ）をとよりも心すき給へる人ハ（風流）
き世の旅ハ思出ル名所〻〻ハ問見きぞ上ら色
ける千代ハ變らぬ〻どりハ雀の松御影の松雲（ナカ）
井ハさゝゝん布引ハ我ガ朝第二ハ瀧しゝあや業平（ウナリ）
中將のこの瀧ハて星ノ河（又ハ）邊ハ螢のと浦路なる
のハるゝめりん（トコロハ）いゝくゝあるらん（今ハ）あがつのゝ（不審）求
塚をいへるハ（ツカ）ハ（ツタヘ）ひゆ名命を失ひし二人の夫ハ
墓しこのや猪名の〻なとハあけがのゝ霧たちて
むるゝやの松のあらびゝ春ハあらぬ〻ゝ山本（昆陽）

霞む〻なせ川男ハ〻ゝ月ハ石清水ゝや宿る
いん秋の山のをゝぢハ色稲葉を渡る風のおと（下）
御身ゝしゝ〻ぞあゝしゝるゝ（テ）さゝも都ハ入給ひ
かゝゝとゝなを見給へバ空しき跡のゝ多くし
たゝまゝ殘る門の内行きかよふ人もなゝを
淺茅ガ原蓬ガ杣と荒ゝたくゝ鳥のゝ（伏處）
ゝゝゝ八月なゝだの事ハ歩バまゝよひ形ゝら
出る月主なを宿ハ獨ゝそゝをり（テ）ゝがゝゝ鳴く
雁の聲ゝへつらくぞゝ（節）ゝ（下略）

壽永三年平家八島の旅此條　平家物語

不知作者或云信濃前司行長作

萩のうへ風もやうやう身にしみて萩に下露もいよ
いよこがれ鳴く虫のこゑ〳〵稲葉うちそよぎ木
の葉のうつるけしきも物思ひをばしたんだにふけゆ
く秋の旅の空は悲しかるべし　まして平家のひ
とびとの心のうち推しはかられてあはれなり　昔は
九重のへに雲に上はるの春の花をもてあそび今
は八島の浦〳〵秋の月に悲しぶかほにて明き

軍記文の常なれど此段むげに詞つづのひゝきかうへ
ゝのひゝけの詞あどるは假字の違へるさへあるとて近き年ごろ童子の常に口ずさみ
ゐるも誦もろ〳〵なるべきことなり

月を詠ては都の今宵いかゞ思やり涙を流し心をくだくそ明しくらせ給ひける

左馬頭行盛

君すめば雲井の月なれどなほうらめしきは都ぞ

左少辨俊基朝臣二ゝび關東へ下向路次の條　太平記

北小路玄慧等作

俊基朝臣は七月十一日に六波羅へめし捕られ

らまとりしで
つゝのあやまり
しるるハ假字
の違へる所な
り

千載集俊成卿。
又やみんかたのゝみのゝ櫻がり。花の雪ちる。春の曙

拾遺集公任卿。
朝まだき。嵐の山のさむけれバ。紅葉の錦きぬ人ぞなき

て關東へ送られたまふ。再犯赦さゞるハ法令の定る所なれバ。何と陳ず〔る〕(衍カ)とも赦されじ。路次にて失はるゝか。鎌倉にて斬らるゝか。二ツのあひだをバのがれじと。思ひ設けてぞ出られける。落花の雪に踏まよふ。かた(交)野の春の櫻がり。紅葉の錦を着てかへる。嵐の山の秋の暮。一夜を明すほどだにも。旅ねとなれバ物うきに。恩愛のちぎり淺からぬ。我がふるさとの妻子をバ。ゆくへもしらずおもひおき。年久しくも住馴れし。九重の帝都

古今集おふる
より朝たちく
れバうねのゝ
にさびぞなく
なる胸のうち
よハ

なれバ。今はかぎりとかへりみて。思はぬ旅にいでたまふ。心のうちぞ哀なる。憂きをばとゞめ(止)ぬあふ(逢)坂の。關の清水に袖ぬれて。末ハ山路をうち(打)いで(出)の濱。沖を遥に見わたせバ。潮ならぬ海にこがれ(焦・漕)行く。身をうき(浮)舟のうき(憂)しづみ。駒もとゞろと踏鳴せ。勢田の長はし打渡り。行きかふ(交)人にあふ(逢・近)み(江)路や。世をうね(憂・宇禰)の野になくたづ(鶴)も。子を思ふかと哀なり。時雨もいたく(甚)もる(守)山の。木の下露に袖ぬれて。風に露ちる篠原や。笹わくる道をすぎゆ

けバ鏡の山ハありとそ涙ぞくもりて見えぬこの世
物を思へば夜のまもおいそぶ森の下草ぞ駒
を止めてうへりみる故郷を雲や隔つらん番場
醒ヶ井柏原不破の關屋ハ荒なをく猶もる物ハ
秋の月いつゝ我ゞ身のをなりなる熱田の八つ
るぎ伏拜ゑ去ひひる今やあるみゝゝ傾く月ぞ
道みえて明けぬ暮ぬと行く道の末ハいゝく
とゝかくふみ濱名の橋ぞ夕潮ぞ引く人もあき
捨小舟沈ををくぬる身ぞしあぞバ誰ゝ問ぞ

とゆふぐぞれ入相ぞ合ハぞて池田の宿ぞ
はきたるすふ元暦元年の頃ぞよ重衡の中將ぞ
東夷の爲ぞとらを生てぞの宿ぞつ記給ひしぞ
東路ぞ記ぞふの小屋ぞいぶせきぞ故さとぞいの
ぞふひしのるらんと長者ぞ娘ゞよみゝりしぞ
の古ぞ哀まぞ思殘ぞ涙あり旅館の燈幽ぞ
して雞鳴曉を催せバ匹馬風ぞいぞそて天龍川
をうち渡りさやの中山越え行けバ白雲道をう
づゝ來てそぞいとぞ忘ぬ夕暮ぞ家郷の天を望

新古今集、西行法師、年ふけて、又ゆくべしと思ひきや、命かけすなる、さやの中山

亘午　日午ニアルヲ亘午トヲフ午ハ今ノ正午ニ当時ヤリ故ニ今ノ正午ノ

みて、昔西行法師が、命ありてまた詠じけり。二
たび越えし跡までうらやましくぞ思ひ出でける
る際ゆく駒の足早き日もすでに亭午に上るバ、この
いひ進るわど、とて、輿を庭前にあゆき止む。あがえを
たゝちに警固の武士を近づけ、宿のなを問ひ給
ふ。菊川と申せ、と答へけるバ、承久の合戰
の時、院宣のきたりし処なほよて、光親、郷、關東へ召
下さるゝ、けれ宿まで誅せらるゝ時、昔、南陽縣、
菊水、汲、下流、而延齢、今、東海道、菊川、宿、西岸、而終、命、
とのたまふ。遠き昔の筆の跡、いまい我が身
の上にあり。哀やいとゞまさるべきかな。一首の歌を
詠じて、宿の柱にぞ書きける。
古もかくるためしを菊川の同じ流に身をや沈めむ
大井川をさぶ給へバ、都にあるもの名を
きゝて、龜山殿の行幸に、嵐に山の花盛りうどう
げきしゆの舟に、詩歌管絃の宴に侍りし
とも。今ハ二たび見ぬ夢とありぬと思ひつゞけ
給ふ。島田、藤枝にかゝりて、岡べのまくずの枯

伊勢物語にある
ごとくなるうつの
山べのうつゝにも
あふことのなかなる
人をおもふものかな

ものかなしきに夕暮ふ宇都の山べを越行けバ蔦
楓いと茂りて道もあし昔業平中將のもみ所を
求むとて東の方へ下るに夢ゆゑ人はあそぬ
ありけりとよみたりしもこのやと思ひもとれ
ぬる清見ごせを過ぎ給へバ都はこのへる夢をさ
へ通さぬ波の關守ふんとゞ涙を催さ向ハい
づこ「下見」やゞ崎興津蒲原うちをだそ「ゞ」の高根
三穂
をみるまへバ雪の中よりたつ煙上ゝ思ふ
らゞ明る霞ふ松見そて浮島ゞ原を過行げ

バ去ほひや淺き舟みえそあるらゝ川田子のみ(身)の
ゐるもう記世をめぐる車ゞ竹の下道ゆき
なやむ足から山のうげふる大磯小磯見おろ
して袖ふも波をこ(潮)ゆるだのいそぐ(急)とはあ
け逝ども日數積逝バ七月廿六日の暮程ふ鎌倉
餘綾磯
「まこそつき給ひ々逝」

後醍醐天皇隱岐國ふ御遷幸北御をり
中宮御暇申ハ條太平記

北小路玄慧等作

元弘三年三月七日。そでゝ先帝隱岐國へうつさせたまふときゝそえ奉るべ。中宮夜（八）まぎれて六波羅の御所へなゝせ給ひ（啓）中門ゝ御車をさしよせたまふ。主上出御ありて御車の簾をかゝげらる（三）君ハ中宮を都ゝとゞめ奉りて旅泊の波長汀の月ゝさすらへ（流離）給ふ。行末の事を思召しつゝけ中宮ハ主上をはるゝゝと遠島の外ふれもひやり奉りて何のたゝ（ゝ）のある世とゝなく。明りぬ長き夜の心まよひにけりし長き

伊勢物語秋のよの千よをひとよにもゝ詞のこゝろ。鳥やおくらん

物思ふゝらんと。共ゝ語りつゝけ給ふ。秋の夜の千秋を。ゝゝよゝふなぞらふ。ゝほゝ（擬）ゝゝ殘りゝ明けぬ（夜）ゝゝ。御心のうちはいかゝ（憂）と。其の言ゝも及ばぬ。ゝゝ（却）いひ慰ゝ給ふゝゝゝ。ゝゝゝ。御涙ゝのみ。ゝゝゝ。てつゝ（強面）ゝゝ見えし有明（月）ゝ。傾く迄ゝゝ。夜もゝでゝあけゝゝゝゝゝゝゝゝれば。中宮御車をゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝ還御なりゝゝゝゝ。御涙の中ゝ。ゝゝ上のゝゝゝゝゝゝゝゝの命よゝ

きびいりをかぎりぞとぞのつきまいてえく〻沈奏
まを給ひなごのらかへる車の別路よめぐりあふ
世のたのみあた御心のうもこそ悲しりれ

俊寛僧都硫黄島ゆく成經・康頼ゆ離別

北條平家物語

不知作者或云信濃前司行長作

都までこそかあたもぞとも（サヤメヨ五六）せめくゆ此の船まの
せく九國の地までけけく給べわのくゆ出ゆ
たしつる程こそ春ハつぞめ秋ハ田のを丸雁の（在）（燕）（面）
わたりづるゆせりゆおかげこのら故郷の事をもつ
たへたくつ今ゆう後ハ何としくかきくべき
とく〻ぞえ焦ゆ給ひりゆ少將誠ゆさこそハか
がしめらめ我らぞめ遣さるゆ嬉しゆ（成經）ち
る事ゆそハ候へども御有様を見奉るゆ更まゆ
く思ひ（意）そらもあゆえ候たぞ此の船まうちのせ
奉りて上りたうハ候へども都の御使いのゆも
のなゆまぐき由を頻ゆ申し其ゆ上ゆうされも
あきまゆ二人あごのら島のうちをいぐたりあど聞

え候えばなるべくあしう候ひあんを成經まづ罷
出のぼりて公とのにはもよく〳〵申〳〵合せ入道相
國のけしきをもうかがひむこのへ人を奉らん
その程は日おろかにつるやうに思ひあしく
すべき給へ命はいのちも大切の事なれバたとひ
よし瀬よこそをきさせ給ふとも〳〵つひにはなど
の赦免あるべく候ふ為きとさまざまなぐさめ
たまへども僧都堪へ忍ぶべうも見え給へざ
るほどに船出さんとしかるべきバ僧都船にのりて
をありつ下りくハ乗りつあしまし豫事ごとをぞ
給ひける少將のこうみを夜の衾康頼入道ゲ形
見ハ一部の法華經をぞ留めける既に纜解き
て船おし出せバ僧都綱にとりつき腰にあり脇に
なるまたけの立つまぐハ乙のをくいで長も及ば
ぬをあり〳〵をを僧都船よとりつきさくいるかか
のく俊寛とぞ終に捨てたく給ふ日おろのな
きけも今ハあるあしくゆるされあるべき都ま
でこそ叶ふまじとてせそく此の船にれきて九國

の地まぐとくどこの色けまぞ。都の御使いのみ
もかなひ候ふまぐらく取付き給ひつる手をひ
きのけく船をバ終ゆ漕出を僧都(一八)せん方あさま
渚ゆ上り倒を伏し(一九)をさなき者のめのとや母あ(乳母)
どを慕ふゆうゆ足摺しをされ乗せくゆけ具し
てゆけとのくまひを喚きけど給へども漕行
く船のならひあく跡ハ白波をのりあを いまど
遠のらぬ船ゆ色ども涙よられて見えぐりゆを
バ僧都島き所ゆ走り上りを沖の方をぞ招きける。

此段字音の詞
あど多くてむ
げゆふおちあく

をのれ松浦小夜姫ゆ。もろもし船を慕ひつ。袖巾
ふりはんもこきてゆハすぎどとぞみえし(一九)程
ゆ船も漕ゆくを日も暮ゆを。僧都(一八)あゆしの
伏どへをかへらぞ。波ゆ足うち洗をせ。露ゆ袖を
をぬらく其の夜ハよゆゆゆ明しゆる。

四條畷戰の時楠正行兄弟參内御暇申
北條太平記

正平四年
楠帶刀正行。舍弟正時。一族うちはを十二月二

北小路玄慧等作

てづゝを出と事がらをくしく情ありてうちみるを心もまゝくしくあゆるむこのうを出バ臣子とある者の教ゐもとてとういで

十三天正本ノ

十七日芳野の皇居を參ず四條中納言隆資を以て申しくるむ父正成尪弱の身を以て大敵の威をくだき先朝の宸襟をやすんまゐらせ候ひし後天下程なく亂出でゝ逆臣西國より攻上り候ふあひだ危を見て命を致す處をのぬく思定めける うゐらうゝつひゐ攝州湊河ゐしゝく討死仕り候ひ訖ぬ其の時正行十三歳ゑ罷成り候ひしを合戰の場へハ伴をゞ河内へ歸し死ゑ殘り候えん ぞる一族を扶持し朝敵を亡し君を御代ゑつけまゐらせよと申置きて死ゑて候ふ然るゐ正行正時をでゑ壯年ゑ及び候ひぬ亦のゝび我と手を碎き合戰仕り候ひぬ且ハ亡父の申しゝ遺言ゐ違ひ且ハ武略の云ゞひ形き謗ゑわつべくゐ おゝえ候ふ有待ゝ身思ふゑ任せぬあゝひゑて病ゐ犯さ早世仕る事候ひなゞばたゞ君の御爲ゑ ゝ不忠の身とゐり父ゝ爲ゐハ不孝の子とゐる 恥きゐを候ふ間今度師直師泰ゑ懸合身命を盡し合戰仕りて彼等ゞ頭を正行ゞ手ゑつけて取

り候ふの正行正時ゞ首をこのまゝふ取られ候ふ
ゝ其の二ゝ中ゝ戰の雌雄を決せべきことゝて候へ
バ今生ゝて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲ゝ
參内仕りを候ふと申しもあへぞ涙を鎧の袖ふ
のけて義心其の氣色ゝ顯ゝをけれを傳奏いまゞ
奏せざる前ゝまづ直衣の袖をぞ濡しける主上
すなはち南殿の御簾を高く捲せく玉顔殊ゝう
るはしく諸卒を照覽あり正行を近くめしく
中略 正行頭を地ふつけとゝの勅答ゝ及むは是

城最期の參内なりと思ひ定めく退出を正行正
時和田新發意舍弟新兵衛同紀六左衛門子息二
人野田四郎子息二人楠將監西河子息關地良圓
以下今度の軍ふ一足もふのぞ一處ふて討死せ
んと約束しをりける兵百四十三人先皇ゝ御廟
ゝ參りて今度の軍難儀あらバ討死仕るべき暇
申して如意輪堂の壁板ゝおのゝ名字を過去帳
ゝ書連ねて其の奥ふ
のゝらゞとのねく思へを梓弓ふ丸のぞゝい

る名をどとゞめるとて一首の歌を書留め逆修の為とかゝしくて各髪の髪をきりく佛殿まかけいき其の日芳野をうちいぐゝ敵陣へぞ向ひける

哀傷

二條院上皇崩御の條 源平盛衰記

永万元年七月同二十八日は新院のくきさせたまひしより御年二十二にしく位をさりたまひしく僅に三十餘日あり（中略）押小路を西へ烏丸を北へ衣笠岡はいたく曉天のほどに茶毘し奉りけりまことにあされなりし事どもあり后宮よりもつぎめ奉りて御身近く召使きし女房恩祿あつく賜へきし卿相雲客御あと慕ひ後世奉らんと歎きの形みたまひ〻きとも死に從ふあさひなゝきむなぐ御おくりあるあくりもく參らせてあくしのへ送所まで合せたまふ頃は秋の最中をかの比事あきバ雲井

頃ハより下ハ御葬送より數日後のあとく見るべし

を照す月影尾のへに通ふ風の音萩のうを風身
にしみ萩が下露おきまさる山ヒけおろもあを
さめく袖ぬれぬ所ぞなくのりる久さむとゝ衣集
く虫のこゑ〳〵も我をそぶらふ〳〵ちしをいとゞ
哀ぞまさりける

後醍醐天皇崩御の條　吉野拾遺

松翁或云忠房朝臣号或云吉房朝臣号

略下

跡の習ふて高き人も賤しきも涙は露ぞ袖ぬら
す

延元四年八月のすゑつかたのころより先帝秋の露ふかこの
れさせ給ひけるが御かぬく時をもとゝろしめ
けるゆゑ同十五日の夜親王を左大臣經忠の亭
に移し奉らせ給ひ三種の御寶を讓りおもしま
す御行末の事いとゝふまゝにふ仰置させ御劍と
法華經とを左右に御手ずから物〳〵給ひいさよひの十六夜
月と共に雲ぞ〳〵せさせ給ひるに附き從ひ奉
りしひとゝも唯闇路に迷ふ〳〵ちあんし給ひ
ける御姿を改め奉らで如意輪寺に御堂の後に

方よをさそ奉る。下略

左府頼長公流矢か中りてうせ給ひけ
るをり。父大相國殿御歎ぬ條 保元物語

葉室時長卿

殿下ハ。御のわよ御手をあてゝ。やゝ久しく泣き
たまひけるが。さるおてゝ言ひ置きける事ハお
のりつるゝ。いのふ此世よりふしむこまる事
多かるけむ。我が身のをの形くなるまつけても。
子共の行末さこそわぶつのあく思ひけめ。我長慶長二 攝政

關白をゝせさきく。今一度天下の事取り行ふ哉
見むやとこそ思つるよ。命形ぶらへくかゝる事
を見るも。前世の宿業ゝかせんよいぐゝ命をし
まぬ兵。必しも疵成うぶることなし。合戰 その上今度
ハ。源平兩氏ぬ輩も。おのるべきそのバ。一人もう
たぬぬそこそきけ。そぬ外。月卿雲客北面まで。白河院参
り籠ぬる者多のうけるよ。此の形ぬバ左府一人。
あぐれ矢よ中りて。命を失ふらんいの形る者の
放しゝん矢よの中るらんうたてきよ。中略 あはぬ

取りもかふる物なりとば忠實が命かのへるすし
換
悲しきかの蘇武が胡國に赴きしも二たび漢家
萬里の月かのへり院君が仙洞に入りしも晉室
七世の風はかへりぬ頼長一たび去て再會いづ
れの時をかまつん　かのひれ伏き命ぞかあらばたと
ひふ返ん　流罪　のるざいかに行るとを忽に失る事
をよもあらじ　そし東國かたくきよせを津輕
や蝦夷の奥まぐも遠路をしのぐく駒に鞭をる
うちてまし　そし西海に左遷せらるを鬼界が島
のををまぐも船に棹をもさを屬ぬ　一ヲトナルヲトハコトニテ　かゆきてく歸
らぬ別れみち悲しきことはかをぞよ計らざ
るき是程に老に心をなやまし屬ることはとて御
涙せきあへさらせ　塞　ぬを見奉るもあはれを
り」

源爲義の子天王丸船岡にて失をる
時乳母に夫内記平太歎の條　保元物語

葉室時長卿

此の君を手をを奉りしより後一日片時も離を

參らせるおとあり。我が身此年の積ることを思ハぜ。早く人と形(成長)らを給へかしとおけらを思ひてやしおひ參らせ(テ)月日の如くに仰ぎつるに只今このくる目を見ることの心うさよ。常ハ我が膝の上に居給ひて。髯をあぢ〻いひ(ハ)人とかりて。國をも莊をも設けを忘(領)せんずらんをはくまひし物をとうたく(假)ぬの寐(寐)覺ふを。内記々々とよぶ御聲の耳ハ底にとゞまるも只今の御をぢ。幼まこのげろへ(髣髴)ぢさらに忘るゝ心しともに覺えぢ。是

より歸りて命長くとも(アリ)千年萬年をふべきや(モイキラフニハカヲセン)死出の山三途の川をバ。誰かハ介しやく申をべき。怖しく思召さんまつけをもまづ我をこそ尋ね給をめ。生きて思ふも苦しをる主(コヲリテ)の御供仕らんといひことをくぢ。腰の刀をぬくまゝ小腹かを切てうせゐる。下略

傳

九條廢帝

本居宣長

九條廢帝と申し奉るハ順德天皇の第一の皇子
ゝて御母ハ中宮藤原立子東一條院と申せ後京
極攝政良經公の御女ゝり帝建保六年十月十日
ゝ降誕御諱ハ懷成と申せ同年十一月廿一日ゝ
親王宣下ありて廿六日ゝ皇太子ゝ立ち給ひ承久三年
四月廿四日ゝ御年四ゝて受禪ありしかるとゝろ
ゝ東のぬしどと北條義時いたく荒びてゆゝしき
世のみだれをおこしたてまつれり族泰時時房などい

ふ賊どもおしたりて同じ年六月ゝ京ゝ亂入りて
いとゝこの多惡しく三所の天皇たゝを遠所ゝ遷し
奉りて此の新帝をもおしわろし奉りぬるハあさ
ましかどもよのつねのことをゝそいへ言もむ方
なきさゝのまことの逆事ゝまことゝ有りける
て此の帝ハ其ゝ七月九日ゝ位を讓らせ給ひて
おゝそのゝ九條院ゝ渡御ありて世ゝ此の院ゝ
御母女院と御同居まゝを文曆元年五月廿日
ゝ崩御御年十七ゝぞおはゝましける いまゝぞ御

元服の儀もおこなはしまさざりき。受禪あるべきのこと。僅に四月ばかりあるべきにあらせたまひて。いまだ即位の儀も行はるべきにあらざりしかば。皇代の御數に入らせ給はざるなり。いづくにか地ありし。御陵の在處も聞えぬ甚いとかしこきりなり。御陵の在處も聞えぬ甚いとかしこき御事なれど。御子は崩御あるべき年に法印性慶の女の腹に姫宮おはしましあるべき生きさせ給ふ。義子内親王と申す。弘長元年三月八日。御年廿八にて院號のうぶりたまひて。和德門院と申しき。

冬嗣大臣 大鏡

藤原爲業

左大臣冬嗣のおとゞ（大臣）は。内麿のおとゞ（北三郎公）の卿の子。十六年。左の大臣の位にて六年。田村の御（文德帝）おほぢ（外祖父）にて。おはしますなるが故に。嘉祥三年庚午。七月七日。贈太政大臣にあらたまへり。閑院大臣と申す。おとゞは。おほうを（男）をとこ子十一人。をんなご（女子）たちは。ものさびしくぞ。をんなごたちは。おとゞ知り侍らぬ。たゞし田村

のみくのどれ御母后贈太政大臣長良のおしらぐ太政大臣良房のわかぐ左大臣良相此おらぐえひとつ御はらぐ腹あり」

長良中納言大鏡　藤原爲業

贈太政大臣權中納言從二位左兵衛督長良卿ハ冬嗣のおしらぐの太郎母ハ白川大臣西三條大臣まおなぐ公卿ふを十三年陽成院御ときまおなぐおほたそするゲゆゑまは元慶元年丁酉正月ま贈太政大臣正一位まま贈太政大臣批把大臣と申ス「ひめ事ハ」此のおしらぐ御子六人おもせ〻其の中ま基經のおしらぐすぐきたまへり」

縣居大人　本居宣長

あがたゐる此大人ハ賀茂縣主氏ホてどわつわや祖ハ神魂神の孫鴨武津之身命まて八咫烏とあり遠て神武天皇を導き奉りたまひし神ある事姓氏録ま見えたるゲよりし此の神の末山城國相

樂郡岡田賀茂大神をもちいつく。師朝といひし人。文永十一年に。遠江國敷智郡濱松庄岡部郷なる。賀茂新宮をいつきまつるべきよしの詔を蒙りて。彼の郷を賜はり。それより彼の宮の神主になさる。此の事引馬草に見え。又綸旨の如くなる物あり。又乾元元年にも。詔をかうぶりて。この岡部の地を領せる。これは正しき綸旨ありて。家に傳はれり。かくて。世々かの神主なりしを。大久の五世の祖政定といひし。引馬原の御軍に功ありて東照神御祖君より。参河國行がうちたる刀と。丸龍の具足とを賜りぬ。此の事は三河記にも見えたり。さて大人は。元禄十年に。此の岡部郷に生れ給ひて。をさなかりしほどより。古學にふかく心をよせて。享保十八年に京にのぼりて。稲荷の荷田宿禰東麿大人の教をうけたまひ。寛延三年に江戸に下り給ひて。それより後田安殿に仕奉り給ふが。此殿より葵の文の御衣を賜はり給へる時の歌に。あふひてふあやのみそをうぢびとはまとふれ。のづかむも

なのと神やちりけむ明和六年十月晦の日とし七十三かそみまかり給ひぬ武藏國荏原郡品川の東海寺北中少林院の山に葬る」ぬを大人北弟子ある其ゞちるしるまゝはとり去るもり彩や父ぬし母とじあゞをまる去るをゞきりのまるゐかををちるハ又よくちるをなるん人かとひきゝてしるすゞ爲くなん」

和文讀本卷三終

明治十五年十一月十三日板權免許

同　年十二月　出版　定價貳拾錢

同　十八年八月十八日再版御届

埼玉縣士族　編輯出版　稲垣千頴

東京下谷區仲徒町二丁目八十番地

普及舍

同下谷區練塀町十四番地

奎文堂

同日本橋區長谷川町六番地

明治十二年九月廿六日　文部省檢定濟

正之證版

發兌

清水書房

明治二十年九月廿六日
文部省検定済

同　十八年八月十八日再版御届
同　年十二月　出版　定價[illegible]
明治十八年十一月十三日版権免許

發兌　[illegible]
普及舎
編輯　出版
埼玉縣士族
東京府平民[illegible]
稲垣千穎

広島大学図書
0130449324